

野鳥におけるオウム病感染状況調査報告原稿

(公社)愛知県獣医師会 野生動物対策検討委員会

オウム病は、オウム病クラミジアが原因の人獣共通感染症です。ドバトをはじめとする野鳥全般、愛玩鳥のオウムやインコなどが主な感染源で、乾燥した排泄物を吸引する事により感染します。オウム病は、保護した傷病鳥が感染しても、症状が出ないことも多く、野鳥を保護及び治療する人は、気が付かないうちに感染する危険性があります。今回の調査で、ドバトだけでなくスズメや、人と密接な場所で巣作りをするツバメからも、オウム病クラミジアが見つかりましたので、その報告をします。

この調査をしようと思った切っ掛けは、鳥から感染するオウム病に感染し、2人の妊産婦が死亡していたことが2017年4月に明らかになりました。オウム病による妊産婦の死亡報告は、国内では今までなく、2017年3月に、厚生労働省は日本医師会に対し、日本医療研究開発機構(AMED)の研究班がまとめた「健康危険情報」を周産期医療にかかわる医師らに周知するよう事務連絡を行ったことにより全国に報道されました。この中で、「妊婦は、オウム病罹患のハイリスクである可能性があり、妊娠期には鳥類、家畜あるいは飼育動物との不必要な接触は避けるべきである」と注意を呼びかけました。

国立感染症研究所の発生動向調査によると1999年4月(感染症法施行後)以降、2017年4月16日までに389人の感染(うち8人が死亡)が報告されています。

国立感染症研究所 感染症発生動向調査週報(IDWR)では、オウム病の感染源となった鳥類の種類についてはオウム・インコ類が約60%で、ハトに関連したものが12%、その他の鳥類が15%だったと報告しています。同じく国立感染研究所による報告では、ドバトの*C. psittaci*保有率は20%と高く、市民への感染の危険性の啓蒙の必要性の重要性を指摘しています。

愛知県内で、保護指導で来院した野鳥の*Chlamydophila psittaci*の感染状況を調査し、オウム病の感染や重症化のリスクを減らすための正しい触れ合い方の啓蒙に役立てたいと思い、この企画を計画しました。なお、このオウム病感染状況調査は、愛知県獣医師会と愛知県衛生研究所との共同研究として実施しました。

調査の概要

調査概要：保護指導で来院した野鳥のオウム病クラミジアの感染状況を調査する。

調査対象：保護された傷病鳥(100検体)

検査項目：オウム病クラミジアPCR検査

検査方法：生前診断の検査材料は、糞便及びクロアカのスワブ材料としました。斃死した場合は、血液及び糞便、クロアカを混合したスワブ材料か、脾臓及び肝臓の一部を検査材料としました。新鮮な糞便の採取を原則としましたが、新鮮な糞便が得られないときはクロアカスワブとしました。この場合、滅菌綿棒をクロアカに挿入して中で回すようにぬぐい取りました。検査に用いる糞便量は1~2回の排泄量とし、綿棒ごと滅菌済スピッツ管に入れて、採取後1週間以内に愛知県獣医師会事務局に着くように冷蔵輸送での送付としました。 +寄生虫検査

調査期間は、2017年9月から2019年7月までとし、保護指導獣医師の中から感染状況調査に協力を得られた58名により103検体を調査しました。

調査結果

(表1)：27種(不明5羽)103検体を調査しました。

(表2)：提出された検体の成体の比率は61%でした。

(表3)：提出された検体材料は、93%が糞便でした。

表1 提出された検体の鳥の種類

種類	数	種類	数	種類	数
スズメ	22	ムクドリ	2	カワラヒワ	1
ドバト	19	モズ	2	キンカチョウ	1
ツバメ	9	トラツグミ	1	シロハラ	1
アオバト	6	マガモ	1	クサシギ	1
カルガモ	5	コノハズク	1	トビ	1
ハシボソガラス	5	カンムリカイツブリ	1	アオサギ	1
ヒヨドリ	5	メジロ	1	セグロセキレイ	1
キジバト	4	イワツバメ	1	その他	5
コミミズク	2	ゴイサギ	1		
フクロウ	2	ツグミ	1		
				総計	103

表2 提出された検体の年齢区分

成体	63
幼体	38
空白	2
総計	103

表3 提出された検体の材料

糞便	96
クロアカスワブ	4
肝臓・脾臓(斃死個体)	1
混合スワブ(斃死個体)	1
糞便(斃死個体)	1
総計	103

(図1)：提出された103検体のうち、11検体でオウム病クラミジアPCR検査陽性との報告がありました。オウム病クラミジアは、保有率に差はありますが、ほぼすべての鳥種で保有すると考えられていますが、国内のオウム病の感染源としては、オウム及びインコの愛玩鳥とドバトが重要であると考えられていますが、今回の調査で陽性が確認された鳥種は、ドバト、スズメ、ツバメ、アオバトの4種類でした。 図1：上位4種

(図2)：ドバト19検体のうち6検体で、オウム病クラミジアPCR検査が陽性(32%)でした。

(図3)：スズメ22検体のうち2検体で陽性(9%)でした。

(図4)：アオバト6検体のうち1検体で陽性(17%)でした。

(図5) ツバメ9検体のうち1検体で陽性(11%)でした。

国立感染研究所による報告では、ドバトのオウム病クラミジアの保有率は20%といわれていましたが、今回の調査ではドバトでは32%と高い調査結果となりました。

図1 オウム病クラミジアの陽性の感染率

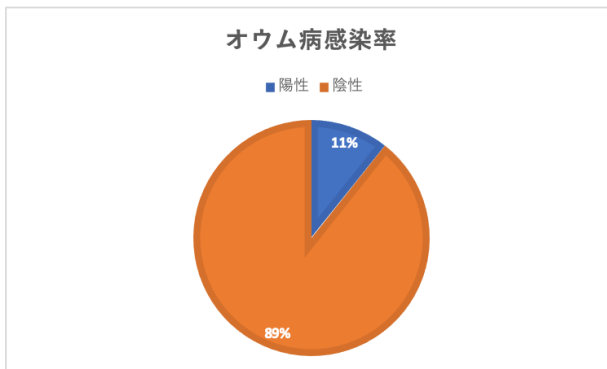


図2 オウム病クラミジアの陽性の感染率（ドバト） 図3 オウム病クラミジアの陽性の感染率(スズメ)

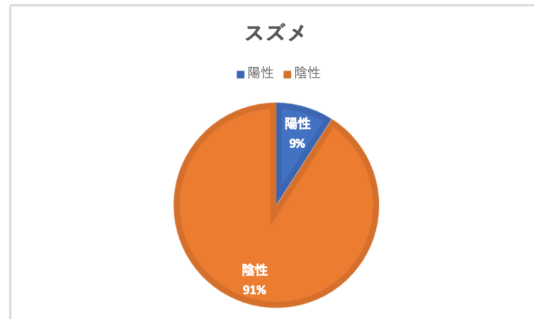
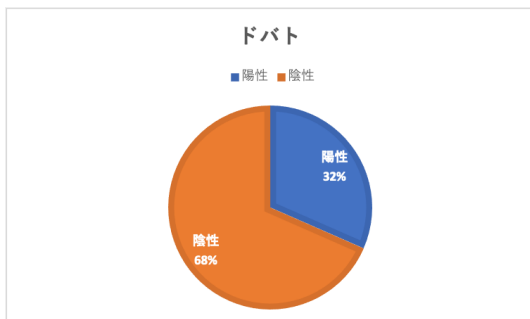
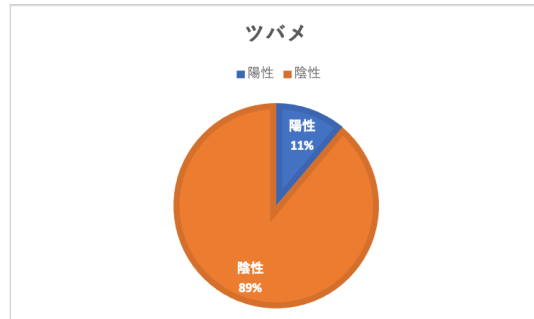
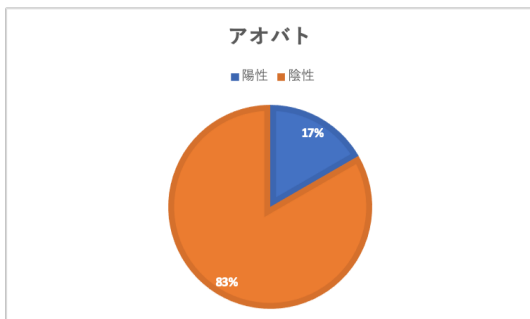


図4 オウム病クラミジアの陽性の感染率(アオバト) 図5 オウム病クラミジアの陽性の感染率(ツバメ)



（表4）：モダンメディア 51 巻 7 号 2005（話題の感染症）オウム病の最近の知見（福士秀人）には、オウム病クラミジア感染症がインコ類の集団飼育場で散有している場合は、幼若鳥の発症率と死亡率は低く 10～20%との報告があります。今回の調査では、幼若鳥の保有率は 18%でした。

（図6・表5）：月ごとの陽性頭数は、3月と10月が多く認められましたが、ドバトの保護頭数が多い月と相関関係がありました。

（図7）は、国立感染症研究所 感染症発生動向調査週報（IDWR）のオウム病の人の発症月別報告数を見ると、4月～6月が多く認められます（図7）。

表4 月ごとの陽性頭数について（成長区分を含めて）

陽性種	成体	幼体	区分なし
1月		1	1
ドバト		1	1
3月	3	1	4
スズメ	1		1
ツバメ		1	1
ドバト	2		2
4月	1		1
その他	1		1
5月	1		1
ドバト	1		1
10月	3		3
スズメ	1		1
ドバト	2		2
12月	1		1
アオバト	1		1
	9	2	11

図6 月ごとの陽性頭数

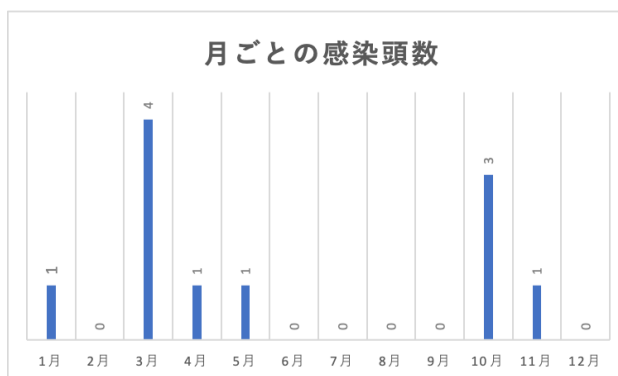


図7 オウム病の発症月別報告数（1999年4月～2004年第53週）

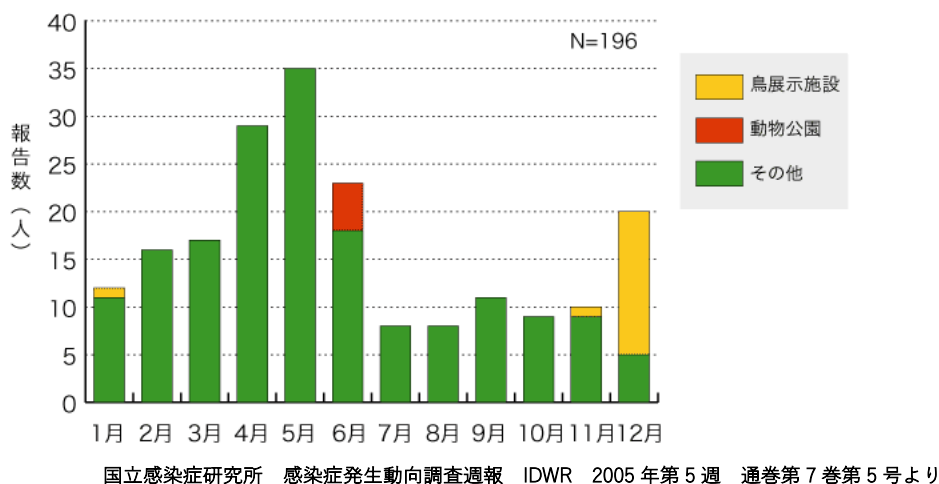


表5 年度・月ごとの検査数について

検査時期	検査数	陰性	陽性	検査時期	検査数	陰性	陽性
1月	7	6	1	7月	19	19	0
2018年	4	3	1	2018年	7	7	0
2019年	3	3	0	2019年	12	12	0
2月	4	4	0	8月	3	3	0
2018年	4	4	0	2018年	3	3	0
2019年	0	0	0	2019年	0	0	0
3月	10	6	4	9月	6	6	0
2018年	10	6	4	2017年	1	1	0
2019年	0	0	0	2018年	5	5	0
4月	6	5	1	10月	11	8	3
2018年	6	5	1	2017年	8	5	3
2019年	0	0	0	2018年	3	3	0
5月	9	8	1	11月	8	7	1
2018年	7	6	1	2017年	5	4	1
2019年	2	2	0	2018年	3	3	0
6月	14	14	0	12月	6	6	0
2018年	10	10	0	2017年	5	5	0

(表 6) : 傷病鳥の保護地域ごとの陽性であった鳥種は、ドバトおよびアオバトがどの地域でも認められました。名古屋市で人と密接な場所で巣作りをするツバメが認められました。

(表 7・図 8) : 陽性だった傷病鳥の動物病院での受入時の診断は、外科疾患が多く認められました。

(表 8) 陽性だった検査材料は、ほとんどが糞便でしたが、1 検体のみクロアカスワブから検出されました。また、斃死個体の検査材料からは検出されませんでした。

表 6 保護地域ごとの陽性種について

保護地域 / 種類	陽性数	保護地域 / 種類	陽性数
あま市	1	東海市	1
ドバト	1	スズメ	1
一宮市	1	名古屋市	5
アオバト	1	ドバト	2
蒲郡市	1	ツバメ	1
ドバト	1	スズメ	1
春日井市	2	その他	1
ドバト	2		
		総数	11

表 7 陽性個体の受入時の診断

内科疾患	1
外科疾患	8
汚染中毒	0
動物に問題なし	1
ヒナの保護	0
原因不明衰弱	1
その他	0
総計	11

図 8 陽性個体の受入時の診断

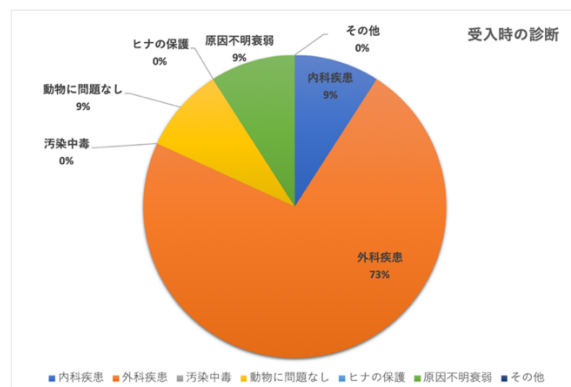


表 8 陽性個体の検査材料 (種別)

検体材料 / 種類	陽性数
クロアカスワブ	1
アオバト	1
糞便	10
ドバト	6
スズメ	2
ツバメ	1
その他	1

考察

国立感染症研究所 感染症発生動向調査週報 (IDWR) では、オウム病の感染源となった鳥類の種類についてはオウム・インコ類が 60% で、ハトに関連したものが 12%、その他の鳥類が 15% だったと報告しています。また、人から人への伝播報告はありますが、国内では知られていません。同一の施設内での発生は、同一の感染源である鳥類からの感染によるものと考えられています。子供よりも成人、特に 30~70 歳に多く、女性への感染が多いと報告しています。

2017 年 3 月に、日本医療研究開発機構 (AMED) の研究班がまとめた「健康危険情報」の中で、「妊婦は、オウム病罹患のハイリスクである可能性があり、妊娠期には鳥類、家畜あるいは飼育動物との不必要な接触は避けるべきである」と注意を呼びかけました。

皆さんも保護者や飼い主さんには、より一層の注意喚起をお願いします。

例えば、

傷病鳥を保護する場合や、愛玩鳥を飼育する場合には、鳥の健康管理に注意が必要です。ケージの清掃、特に糞便の処理は頻繁に行いましょう。また、粉塵となった乾燥した排泄物を吸い込まないようにマスクをし、嘴や爪による外傷から感染する可能性もあるためグローブを装着します。口移しの給餌などの過度の接触を避けるように保護者 (飼養者) に指導して頂くことも重要です。

また、飼養管理する動物医療関係者は、人や他の鳥への伝播を防ぐため隔離室で飼養しましょう。また、マスクと手袋等で感染を予防し、飼養器具の消毒の徹底をお願い致します。なお、クラミジアの基本小体は 0.3 μm と小さいため N95 マスクが推奨されます。

最後に、厚生労働省の感染症法に基づくクラミジアの消毒・滅菌の手引きを記載します。

クラミジアは、低水準消毒薬であるクロルヘキシジン、第四級アンモニウム塩、両性界面活性剤および中水準消毒薬であるポビドンヨードにおいて有効性が確認されています。したがって、大部分の消毒薬に感受性があるといえます。

クラミジアで汚染された器材は、0.1~0.5w/v% 両性界面活性剤、もしくは 0.1w/v% 第四級アンモニウム塩などの低水準消毒薬を使用します。環境消毒は、汚染局所に対して消毒の必要性がある場合に行います。使用する消毒薬は器材の場合と同様で、0.1~0.5w/v% 両性界面活性剤、0.1~0.5w/v% 第四級アンモニウム塩であります。汚染リネンは、熱水消毒 (80°C・10 分間)、もしくは 0.05w/v% (500ppm) 次亜塩素酸ナトリウム溶液に 30 分間以上浸漬して消毒します。